

論 文

シェル・シルヴァスタインの詩の音が持つ力：  
ウーピー・ゴールドバーグたちは何故彼の作品をリサイトするのか

小 泉 純 一

日本福祉大学 全学教育センター

The Power of Sound in Shel Silverstein's Poetry:  
Why Does Whoopi Goldberg and Others Recite His Poems

Junichi KOIZUMI

Inter-departmental Education Center, Nihon Fukushi University

**Keywords :** Shel Silverstein, 詩の音の力, ポエトリー・リーディング, ポエトリー・リサイテーション

Abstract

Shel Silverstein is a versatile artist. He didn't write a novel but wrote poems, a story with a picture, was a song writer and sung his poems and songs. He drew a cartoon to some of his poems. He grasped the limits of a picture and a word as a cartoonist. A picture gives a clue in some of his poems. In some poems a sound gives a hint. Most of his works are made for reciting and singing. In this paper I will show how sounds resonate in his poems, and analyze the effects that the words, images and sounds produce. We can see a lot of private movies where a child and a student recite his poems on the net. Some celebrities such as Whoopi Goldberg and the rapper, T-pain recite them too. Also some university students played a musical based on Silverstein's *Where the Sidewalk Ends*. Why do they recite or perform his poems? By analyzing their reciting and performance I will show the reason. Reciting a poem basically gives them pleasure or emotional catharsis. Voicing out makes one feel better. It is easy to understand English by listening while it is easy to understand Japanese by reading. In English education we should realize this trait of English that oral expression should be stressed as a crucial segment. In reality so scarce time is allowed to recitation or voicing of words in English education in Japan. As a poem is emotional and rather short it is good for recitation. Silverstein's poetry is popular with children in U.S. and they are willing to recite it. It's funny and takes the side of children. These traits must be true to Japanese students. Reciting poetry will not only improve a student's competence of English but make them realize its rhythmic pattern and beauty which will be incentive to study.

## はじめに

歌も歌い、短い戯曲も執筆したシェル・シルヴァスタインは多才な作家だが、小説は書かなかった。ただし『大きな木』のような挿絵付きのお話は書いている。それ以外にも多くの詩も残している。小説を書かなかった理由は、詩にみられるようにコンパクトなイメージの切れ口で表現することを好んだことと、声に出して表現できるサイズが関係していると思われる。黙読するのではなく、言葉を音として再現することを前提に作品を作っていたために、小説というスタイルを取らなかったのではないだろうか。日本の作家の中にも詩人としてのシルヴァスタインのファンは少なくない。彼の詩を翻訳した小説家の倉橋由美子や川上弘美の訳業を見ればそれは明らかだろう。しかし、言葉遊びの落ちずら翻訳しようとする倉橋をもってしても日本語に移しかえられなかったものは、翻訳すると失われてしまう音にまつわる要素ではないだろうか。一方英語を母国語とする人たちが彼の作品をどのように楽しみ、どのような点に面白さを感じているのかは音にかかわる要素が多い。それは日本の英語教育に何が足りないのかを照らし出している。一言で言えばそれは音の持つ力であり、それを楽しめる態度なのだ。小学校から英語教育を行う流れの中で、英語を口にすることでどのように楽しむことができるのかという視点は一丁目、一番地に思える。つまり読んだり書いたりする英語にとらわれすぎると、聞いたり話したりする英語の音の重要性を軽んじたり、その重要性を理解できなくなるのではないだろうか。シルヴァスタインの詩の言葉における音の重要性、詩人本人や読者がどのように彼の作品を音声化しているのかを明らかにし、それを今後の日本の英語教育の中にどのように取り入れることができるのかを明らかにしたい。

英語を読むとき、英単語を一つ一つ辞書で調べて、その意味を日本語に置き換えても、内容がさっぱり理解できない時がある。単語の意味を日本語に置き換えようとする以前に、文章が内包するイメージを頭の中で想像する必要がある。イメージとは、きっちりと言語化できる手前で、言葉が姿を現そうともがく姿に例えることができる。日常会話の決まり切ったパターンを英語で再現する場合は当てはまらないが、それまでになかった意味や世界観を創造しようとする場合、新しい何かを言葉で創造しようとする時、言葉が音や映像においてどんな働き

をしているのかに敏感でなくてはならない。一つの英文、あるいは複数の英文が一緒になってどんなイメージを作っているのか、そのイメージがどのように言葉で表現されているのかを考えるということだ。カートゥーニスト（一コマ漫画作家）でもあるシルヴァスタインの場合、挿絵抜きには成立しない作品もあれば、言葉のサウンドや楽器などの音抜きには成立しない作品もある。

シルヴァスタインの詩を構成する要素は、言葉、挿し絵、音に分けることができる。言葉それ自体にもイメージを作る力はあるから、それと実際に書かれている挿し絵も共鳴を起こす。挿し絵付きで詩を書く詩人といえば、シルヴァスタイン以外にもセサミストリートの作家、Jeff Moss (1942-98) がいる。彼が書き残した *The Other Side of Door* (1991) はシルヴァスタインと共通する要素がある。あるいは一編の詩を元にして絵本にするケースもある。e.e. cummings (1894-1962) の詩 "may I feel said he" にマルク・シャガールの絵画を合わせたものや、Naomi Shihab Nye (1952- ) の詩 "Famous" を絵本にしたものなどを挙げるができる<sup>1)</sup>。詩を読むのになれた読者であれば絵という助けがなくても詩をイメージすることは可能だが、それになれていない若い読者は絵があることで詩のイメージを作りやすくなるだろう。詩を読むのになれた読者にとっても、シャガールの絵とカミングズの言葉が新たに作り出すイメージはスリリングなものである。言葉が作るイメージに詩が依存する場合、絵があることは作品の理解を促進させると言っていいたいだろう。

## 挿絵がないと成立しない作品

シルヴァスタインの場合、彼のカートゥーニストとしての始まりはアメリカ軍に所属していた際、軍の新聞 *Stars and Strips* の編集を担当し、そこで一コマ漫画を描いていた頃に遡れる。一例を挙げると、アメリカ軍の二等兵が上官に次のように告げている一コマ漫画がある。二等兵はカメラやカバンをいくつも首からぶら下げ、背中には傘を背負っているようだ。のんきそうな表情の二等兵は、"To be perfectly frank, sir, I don't have room for M-1..." と告げている。言葉は途中で切れているのだが、M1 ガーランドか M1 トンプソンなどの軽機関銃のことを言おうとしているのだと思われる。「正直に言って、M1 を持つ余地はありません」という言葉と、戦場に赴くというより、物見遊山の旅行に行くような様子を

見れば、この一コマ漫画が何を伝えようとしているのかは了解できる。第二次世界大戦や朝鮮戦争が終わった頃のアメリカ兵の意識の変化を示しているのだろう。この絵がなく、上に引用した英文だけでは意味不明となることは間違いない。

挿絵がなければ成立しにくい作品は *Where the Sidewalk Ends* (1974) (以降ここからの引用が多いので『歩道の終わるところ』とし、WSE と略す) 以後の詩作品の中にも散見できる。*Falling Up* (1996) (以降FU と略す) におさめられた "GARDENER" (FU 68) も言葉だけでは内容を理解することはできない。

We gave you a chance  
To water the plants.  
We didn't mean *that* way---  
Now zip up your pants.

タイトルは「庭師」であるから、植物に水をやっているところだと理解できる。しかし、「そんなやり方ではないから、ズボンのジッパーを上げなさい」という言葉から内容を推測できる読者は限られるだろう。「そんな」はイタリック体で強調されているが、書かれている言葉だけでは何を言っているのか不明なのだ。挿絵では、大、中、小鉢植えが右から並び、左端に男の子が背を向けて、背中を丸めて立っている。お尻を見せながら、顔を半分読者の方に向け困ったような表情をしている。鉢植えの下からそれぞれ少し水が漏れているように見える。手は前に隠れて見えないが、どうもズボンのジッパーを上げているように思える。つまり、男の子は鉢植えにおしっこをかけていたところを見つかり、水をあげて欲しいけれど、おしっこをかけるのはやめて、と言われていたところなのだ。この内容を直接的に書くのではなく、挿絵で暗示する点に落ちがある。この内容を言葉で説明するより、絵を使って暗示的に示す方が、読者に想像させる点で、作品の味わいが深まると考えたのだろう。言葉と挿絵を補完的に利用することで、シルヴァスタインはそれぞれの限界を超える術を示している。

同じような作品をもう一つ取り上げたい。"SAFE?" (FU 25) も挿絵がないと作品を理解することはできず、さらにダジャレが鍵になっている。毛糸の帽子をかぶり、マフラーをした女の子が歩道から車道を見回している。後ろには八階建てのビルが建っている。文脈からすれば

「この道を渡っても安全なのか」女の子は確かめていると思える。

I look to the left,  
I look to the right,  
Before I ever  
Move my feet.  
No cars to the left,  
No cars to the right,  
I guess it's safe  
To cross the street....

英文を読む限り、右左を確認して女の子は道を渡ろうとしており、危険はなさそうだ。しかし、挿絵には八階のあたりから、まさに女の子の頭上に落下しつつある金庫が描かれている。落下する金庫を文章で説明するより、絵で描いた方が手っ取り早いし、タイトルに付けられている疑問詞も、「安全なの？」とも読めれば、「(こんなところに) 金庫が(落ちてくるのか)?」とも読める。ダジャレとは言葉が持つ揺れやズレ、多義性の上に成立するものであり、女の子が意識しているセーフと金庫のセーフのズレが鍵となっている。挿絵がなければ成立しない作品の一例である。発想の豊かさ、多才さ、柔軟な考え方がシルヴァスタインの特徴なのだ。

言うまでもなくシルヴァスタインは遊びの意識を強く持つ作家と言える。それは読者に対するサービス精神という点でも過剰なまでに発揮されるのだが、最初に作品を面白がっている読者は作家本人なのではないだろうか。死後に出版された *Everything On It* (2011) (以降EOI と略す) の "THREE FLAMINGOS" (72-3) も挿絵があることで面白さが了解できる。

Who ate the S's right out of my name?  
Without any S's it's just not the same.  
What a horrible crime---what a sin---what a shame,  
And I really don't know just who is to blame.

誰かが彼の名前の S を食べてしまったらしいのだ。下には HEL ILVER TEIN と三次元的に描かれている。このボケっぷりには呆れるしかない。そもそもこのような馬鹿馬鹿しいシチュエーションを考え出したのは作家本人なのだから。さらに欠落部分のある彼の名前が書い

であるページとは反対の右側のページに立ち去ろうとする三匹のフラミンゴが描かれ、その首が見事なS字になっているのだ。そのS字以外にフラミンゴが犯人だという証拠はないが、三匹のとぼけた目つきからして疑いをかけられてもおかしくはない。フラミンゴはシルヴァスタインの名前の中のSを飲み込んでみたものの、お腹に入る前に喉で止まって、その形を示しているというのだ。しかし、そもそもフラミンゴの長い喉はそんな形をしているから、飛んだ濡れ衣をかけられているのかもしれない。フラミンゴの喉の形に着目し、この詩の状況を思いついたのだろうが、S字にこだわって、ありえないような状況を想像している点で、日本で言えばボケ役、アメリカであればスタンダップコメディアン的なサービス精神の持ち主がシルヴァスタインだと考えていい。

### 挿絵が描かれていない作品

一方、挿絵がなくて、言葉だけでできている作品も彼は書いている。例えば、独立記念日で花火が打ち上げられる様子を描いた "THE FOURTH" (WSE 15) では、縦長の形で花火が打ち上がる音と、それを見て上がる歓声を書かれ、挿絵は書かれていない。読者は擬声音から謎解きをしなくてはならない。子どもが大人から言われたくない言葉を網羅した "LISTEN TO THE MUSTN'TS" (WSE 27) にも挿絵は描かれていない。

Listen to the MUSTN'TS, child,  
Listen to the DON'TS  
Listen to the SHOULDN'TS  
The IMPOSSIBLES, the WON'TS  
Listen to the NEVER HAVES  
Then listen close to me---  
Anything can happen, child,  
ANYTHING can be.

最後の三行でそれまでの詩のトーンが変わっていることに気がつかないと、この詩の意味を理解することはできない。最初の五行は洋の東西を問わず子どもたちが大人からよく言われる台詞だ。「しちゃダメだよ」、「すべきではないよ」、「できっこないから」、「そんなことは誰もしないよ」、「そんなことした人はいませんよ」などなど。そんな大人の言葉を聞きなさいという流れは六行目で変わっている。ここまでの子どもを叱る大人の命令口

調ではなく、「私のいうことをじっくりと聞きなさい」と子どもに優しくアドバイスする声音を使い、子ども達の立場に立って、「どんなことでも起こる可能性はあるし、どんなことでも存在可能だ」と、子どもたちの欲望を可能性としてでも肯定する側に立ってみせる。大人が使う言葉の欺瞞を観念的に切り出し、それに対する反論を示しているのだ。挿絵は描きにくいのかもしれない。あるいは、最後の二行が腑に落ちるなら挿絵など必要はないと判断した可能性もある。子どもに対する大人の命令口調から、子どもの側に立ったアドバイスに声音が変わっていることに気づくことができなければ、この作品の意図は理解できないだろう。分からない言葉を辞書で調べただけでは、作品の内容を理解することはできない。作者の意図を探りつつ、作品が作るイメージを再現し、言葉の音が持つ力や、誰が誰に向かって、どんな口調で話しているのかを想像することで、作品が持つ力は花のように開いてくる。

### 音が聞こえてくる作品

先ほど取り上げた "THE FOURTH" で花火の擬声音が聞こえてきたように、言葉の音以外の様々な音が響いている作品もある。"NOISE DAY" (FU 26-7) はそんな作品だ。一年に一度来る「子どものための騒音の日」には、いろんな音を出してみようとシルヴァスタインは提案する。

Screech, scream, holler, and yell---  
Buzz a buzzer, clang a bell,  
Sneeze---hiccup---whistle---shout,  
Laugh until your lungs wear out,  
Toot a whistle, kick a can,  
Bang a spoon against a pan,  
Sing, yodel, bellow, hum,  
Blow a horn, beat a drum,

悲鳴をあげたり、叫んだり、しゃっくりをしたり、ヨーデルを歌ったり、大声をあげたり、声を使う以外にも、ブザーやベルを鳴らしたり、缶を蹴る音やスプーンを叩く音、楽器を鳴らす音も聞こえてくる。この作品をもとにアメリカの大学生が動画を作り、詩を声にしている作品がある<sup>2)</sup>。そこではヨーデルや歌声が再現されているだけではなく、それ以外の音も挿入されている。文字で



読むだけでは再現できない本物の音が再現され、本来この作品が持っていた音の可能性がこの動画で実証されている。作品の終結部を次に引用しておく。

Ride a skateboard up the wall,  
Chomp your food with a smack and slurp,  
Chew---chomp---hiccup---burp.  
One day a year do *all* of these,  
The rest of the days---be *quiet* please.

スケートボードをした後は、上品ぶるのはやめて音を立てて食事をし、ガツガツ食べて、しゃっくりをしてゲップをする。黙読に向いた作品ではなく、音にして楽しむ作品であることは確かだ。文章の流れの強弱と強勢に気を配り、音を再現できてこそ、この作品を理解することができる。ここでやっとピリオドが打たれ、音のコーラージュは終わりとなる。一年に一日はそんな騒音の日を過ごし、「残りの日には、お静かにお願いします」と語り詩は終わる。騒音と静寂の対比が表現されている。

脚韻や音を使ったダジャレのような遊びがある作品でも音の重要性は指摘できる。日本語で言うなら、「一本でもニンジン、二足でもサンダル」のような遊びの歌であり、内容を理解する以前に、言葉をうまく音声にすることが求められる点では、日本語も英語も同じだろう。「DENTIST DAN」(FU 130) はそのような作品の一つだ。タイトルにこそ「歯医者」と書かれているが、作品本体に「歯医者」と言う言葉は出てこない。

Nentis Nan, he's my man,  
I go do im each chanz I gan.  
He sick me down an creans my teed  
Wid mabel syrubb, tick an' sweed,  
An ten he filks my cavakies  
Wid choclut cangy---I tink he's  
The graygest nentis in the lan.

すごい訛り方で書かれているので、読者は何が書かれているのかをまず解き明かさなくてはならない。タイトルでは /d/ 音の頭韻だが、書き出しは /n/ 音の頭韻に代わり、行末の "man" と同韻を踏んでいる。二行目は "I go to him each chance I can" なのだろう。歯医者は虫歯の治療をするものだが、歯医者のダン健康な歯にメー

ブルシロップを塗りつけたり、虫歯にチョコレートキャンディを詰め込んだりしているらしい。その証明として挿絵には口を大きく開けた男の子が描かれていて、上の前歯が一本と下の歯が数本しかない。シルヴァスタインは歯医者を扱った作品をいくつか描いているが、好意的に描かれた歯医者はいない。男の子は甘いお菓子が大好きだろうし、歯医者としては虫歯の治療を継続する方が商売にはなる。歯を失った結果、この子はちゃんとした発音ができなくなり、それがこのような発音の崩れとなっているとも考えられる。正しい綴りの言葉を意識しつつ、そこからズレた発音の面白さを感じることができるなら、この作品を楽しむことができるだろう。

作品の中には無音状態を暗示するものもある。A *Light in the Attic* (1981) (以降 LA と略す) におさめられた "DEAF DONALD" (LA 143) では健常者の女の子、スーと聴覚に障害がある男の子、ドナルドの間にコミュニケーションが成立していない悲劇が描かれている。ドナルドに会ったスーは、「好きだよ」とか「私のこと好き」と聞くのだが、それに対してドナルドは次のような三つの手話をしている様子がイラストで描かれている。一つ目ではドナルドが自分の胸を指差している、二つ目では広げた両手を胸の上で交差させている。最後は相手、つまりスーを指差している。この手話のイラストが五回繰り返され、それに対しスーは "Do you like me too?" と問いかけ、同じ手話の繰り返しに対し、最後に "Good-bye then, Donald, I'm leaving you." と告げる。作品の最後から二行目で、"And she left forever so she never knew" と書かれ、最後の行に同じイラストが描かれた後に、"means I love you." と書かれている。スーの言葉は過剰なまでに聞こえてくるのだが、ドナルドが何を言いたいかは最後までアメリカ手話を知らない者にははっきりしない。ただ、ドナルドが同じ手話を黙って繰り返すパントマイムのような無音の手の動きとスーの言葉が対比され、無音と音の状態が際立って示されている。書き言葉ができる前に話し言葉が延々と使われてきたことを考えると、言葉とはまず音として存在し、書き言葉の中でも音は響き合っていると考えるのが妥当だろう。黙読を意図して書かれた作品であっても、言葉の音から離れたり、それを拒絶できるものではない。外国語を学ぶときにも、ただ言葉を棒読みするのではなく、どのように音声化するかを考慮する必要がある。

### ミススペリングをテーマにした作品

言葉の音の力からは離れるが、文字が書いていないと作品として成立しないものについても触れておきたい。  
"ONE OUT OF SIXTEEN" (FU 120) はスペリングの綴りのミスが作品の落ちにっていて、そのまま日本語に翻訳することはできない作品だ。

I'm no good at History,  
Science makes no sense to me,  
Music is a mystery,

得意な教科が何もない生徒が十六行かけて自分の不得意な教科などを列挙する。しかし幸いなことにスペリングは間違っていないのだが、最後でミスを犯してしまう。

Botany's just flowers smelling,  
Even Art's too hard for me.  
Well, at least I'm good at *Speling*!

「植物学って花の匂いを嗅ぐだけ、芸術も僕には難しい。やった、少なくともスペリングは得意だよ！」と得意なものをついに見つけ出したのだ。この詩を音読しているだけならスペリングのミスは露見しなかったろう。唯一自信のあったスペリングで文字を書いたがゆえに、スペリングも得意ではないことが明白になってしまう。文字が書かれていなければこの作品の落ちはわからない。自分が面白いと思うことなら、音やイラストだけでなく、スペリングまで笑いの素材にしてしまう点にシルヴァスタインの発想のユニークさを求めることができる。

### "Written Poetry", "Spoken Poetry" と歌われる詩

アメリカで詩の朗読が一般的になるにつれ、文字として読む詩に対しては "written poetry", 口で語り、耳で聞く詩には "spoken poetry" という分類が使われるようになってきている。シルヴァスタインの場合はその両方の要素を最初から備え、さらに歌うことを前提にした詩も書いてきている。作家としてのデビューはカートゥーニストであったが、カントリー音楽の作詞をし、グラミー賞を取ったり、自分で歌を歌うことも多かった。詩集としての第1作目『歩道の終わるところ』(1974) 出版後、1983年にはこの詩集からCD版も発売され、このCDは翌年のグラミー賞で「子どもたちのためのベス

トレコーディング賞」を獲得している。CD版では『歩道の終わるところ』に収められた作品を語っているものもあれば、歌っているものもある。ネット上でも本人が子ども達に歌っている動画を見ることができる<sup>3)</sup>。この動画では『歩道の終わるところ』から "BOA CONSTRUCTOR," "SARAH CYNTHIA," "UNICORN" の三つの作品を数十人の子どもたちに囲まれて歌っている。"BOA CONSTRUCTOR" はつま先から、足、腿、胴体と大蛇に飲み込まれる人間のプロセスを歌うコミカルな作品で、子どもたちは喝采をあげたり、歌声を合わせて一緒にその場を作っている。他の二曲に関してもしリピートの部分は子ども達とシルヴァスタインと一緒に歌っていて、詩の受容に関して示唆深い。詩を一人で黙読し、その内容を理解しようとするのではなく、みんなで声を合わせて、作品の音の面白さやリズムと一緒に体験することができる詩なのだと思う。イギリスの Dylan Thomas (1914-53) ディラン・トマスやアメリカの Billy Collins (1941-) ビリー・コリンズのように朗読に定評のある詩人、書き言葉の詩人で歌も歌う詩人は多くはない。歌も歌うことを得意としていた点にもシルヴァスタインの詩人としての特徴と言えるだろう。

音声資料が残されるようになり、底本を何に求めればいいのかという点で、今後解決する必要がある課題が現れてきている。例えばシルヴァスタインの出世作 *The Giving Tree* (1964) は四十周年版から作家本人が朗読するCD付きで販売されているが、シルヴァスタインは底本通りには読んでいない<sup>4)</sup>。『歩道の終わるところ』でも同じ問題は起きている。兄がメソメソ泣く妹を競売にかけの様子を描いた "FOR SALE" (WSE 52) という作品でそれは起きている。「妹売ります！」で作品は始まり、誰か買い手はいないかと進んでいくが、なかなか買ってくれる人は出てこない。

Oh, isn't there, isn't there, isn't there any  
One kid who will buy this old sister for sale,  
This crying and spying young sister for sale.

泣き虫で、こそこそ兄を覗き見る妹を買ってくれる人いませんかと呼びかけ、ここで作品は終わっている。挿絵では、左側にオークションハンマーを持ち口を大きく開け怒って見える兄が、足を大きく開いて立ち、右隅に座っている小さな女の子を指差している。この詩集には

内容が親や大人の権威を嘲るような作品があるため、禁書扱いにしている地域や学校もある。この作品も、妹に対する冷たい対応ゆえに、子供が読むにはふさわしくないと考えられる可能性もある。実はCD版ではシルヴァスタインは上の部分の後に二行を付け加えて声にしている<sup>5)</sup>。

Do I hear anything?

OK, I'll keep her next Wednesday.

買い手が現れないので、今日は売るのはやめて、来週まで伸ばすことにしたのは、シルヴァスタインの子どもへの忖度だろう。結果的に結末部分が違う二つの作品が出来上がってしまった。書籍をベースにした判断であればこの作品の底本は一つ目だが、そのヴァリエーションとしてCD版を捉えるしかない。音源や動画などがネット上からも得られることで、活字版のみを中心とする作品の理解は変更を余儀なくされていると言えるだろう。

### 楽器を演奏するように詩をリサイトする作者と読者

読み上げたり、歌われたり、詩がパフォーマンスされる点で、詩を読む行為は音楽を演奏するのにたとえられると思う。作家の視点から言えば、シルヴァスタインのように歌ったり、語ったりする音源がある場合、それは明らかだろう。むしろ、中世のヨーロッパで吟遊詩人達が楽器を片手に詩を吟じていたことを考えれば、その姿に戻ってきたと言ってもいいだろう。活版印刷は多くの書物をより多くの読者に届けることになったが、作品から声を奪ってしまった。一方現代において音声資料や動画をネットから得られるようになり、詩人は失った声や体の動きを取り戻したと言えるだろう。では読者にとってはどうか。外国の詩を理解するには、書かれている内容を母国語に置き換えて理解する必要はあるが、それ以上に外国語のまま理解して、再現する必要があると思う。アマチュアの演奏家が楽器の練習をし、ある曲を弾きこなそうとするのと同じように、外国語で書かれた詩を外国語で読み上げる練習をする必要がある。シルヴァスタインの場合は本人が語ったり、歌ったりしている音源などがあるから、その真似をして作品を声にすることができる。そう考えると、英語を声にして発声する事はスポーツの練習や楽器の演奏に似ている。

英語を母国語としている人たちも同じことをしている。動画のネットサイトで「シルヴァスタイン」を検索すると、海外の子どもや大人が彼の作品を演じたり、リサイト（朗読）する動画が数限りなくある。小学校から大学まで英語を学ぶプロセスで、アメリカの学校では生徒達に詩の暗唱をさせてきている。表意文字の漢字が使われる日本語は目で文字を見て内容を理解する言葉であり、表音文字のアルファベットが使われる英語は耳で聞いて単語や文章構造を認識するのに向いている。そもそも英語というのは音にしようまく読み上げた時に快感が得られる言葉だと思う。言葉は記号内容「シニフィエ」と記号表現「シニフィアン」に分けて理解されているが、作品を朗読することは記号表現に関係している。記号内容は英語から日本語に置き換えても理解することはできるが、記号表現の方は元の言葉の特性を離れては存在できない。外国語の理解を難しくさせるのはこの点に求められる。英語の詩を暗唱し、朗読することで、英語の音、リズムや強弱に対する理解が深まり、英語を発声する声を作ることができ、英語の運用能力の向上にも繋がるだろう。

シルヴァスタイン本人が自作を朗読する音源があるものについてはいくつか触れたが、彼の作品をたどると読む子供たちの動画や、見事に読みこなしていたり、演じている動画などがネット上で簡単に検索できる。シルヴァスタインの作品がどのように受容されているのか、作品の音の要素や声にすること自体を彼の詩のファンがどのように楽しんでいるのか、その魅力をどこに見出しているのかについてここからは述べることにする。

ネット上にはシルヴァスタインの作品を声にしている動画が数多くある。詩の朗読以外にも、*The Giving Tree* や *The Missing Piece* のようなお話を動画にして、音声をつけているものもある。子どもたちが好んで声にしている作品の一つに "SICK" (WAE 58-9) がある。全部で三十二行あり、日常生活で使わなくて、専門的で難しい病気の名前の羅列部分もあり、暗唱するには難しく思えるのだが、小学校低学年の女の子が何も見ずに、一気にこの作品を暗唱している動画もある。おそらく日本語と比べて、脚韻だけでなく頭韻が使われ、韻を踏みやすく、リズムや強勢がつけやすい英語の方が暗唱に向いた言葉なのだろう。加えて、声にした時の快感も英語の方が感じられるのだと思う。そのような傾向を持つと同時に、この作品は子どものリアリティに即しているか

ら、暗記しやすく、子どもたちが暗唱したくなる力を持っているのだろう。

"I cannot go to school today,"  
Said little Peggy Ann McKay.  
"I have the measles and the mumps,  
A gash, a rash and purple bumps.

ペギーは病気を理由に学校をずる休みしようとしているのだ。「はしかにかかって、おたふく風邪も/切り傷は深く、鬱血した打ち身」で始まり、延々と病気や怪我の名前を挙げていく。この子がずる休みしようとしていることは、作品の最後で明らかになる。

My brain is shrunk, I cannot hear.  
There is a hole inside my ear.  
I have a hangnail, and my heart is ---what?  
You say today is ... Saturday?  
G'bye, I'm going out to play!

「脳みそが縮む、耳が聞こえない。耳の中に穴が開いている。爪がささくれているし、心臓が」と言ったところで、話を聞いていた相手が今日は土曜日だと告げると、それまで話していたことを無しにして、「じゃあ、遊びに行くね」と告げると作品は終わる。子どもたちの動画でも、「えっ、何？」という最後の三行で言葉のトーンは大きく変わる。それまでは如何にして学校をずる休みするか、もっともらしい病気の名前を畳み掛けていたのだが、土曜日だとわかると、表情も柔らかになり、口調も軽やかになって、遊びに行くのだ。子どもたちがこの作品を朗読する理由は、遊びに行きたいから学校をずる休みしたいという気持ちに共感できるからだろう。また子どもたちの感じるリアリティがこの作品で表現されているからでもある。学校に行かなくてはならないというのがどれほどのストレスになるのか、そして行かなくていいとなると気持ちがどれだけ軽くなるのか、そうしたプロセスをこの作品を通して子どもたちは再現できる。そんな気持ちを言葉にすることで、カタルシスを感じるのではないだろうか。ここで使ったカタルシスを説明するなら、一つのストーリーを演じきる、あるいは遊園地のローラーコースターを乗り終えるような感じにも例えることができるのではないだろうか。文学作品を黙読する以

外に、声にして文学を享受するスタイルが今でも英語圏には普通に存在している。声にする理由の一つは、ある状況を再現することでそうしたカタルシスを得られるからではないだろうか。

### セレブ達がリサイトする作品

女優のWhoopi Goldberg (1955-)、ウーピー・ゴールドバーグとラッパーのT-Pain (1985-)の二人もシルヴァスタインの作品を朗読する動画をネット上で公開している<sup>6)</sup>。ウーピーは"HOW NOT TO HAVE TO DRY THE DISHES" (LA 12)を読み上げているのだが、それにはある目的がある。この作品はどうしたらお皿を拭く手伝いをしなくてすむのか、その方法を教えてくれる。挿絵には、カーリーヘアーの女の子が自分の顔より大きなお皿を拭いている姿と、その足元には割れたお皿が描かれている。全部で八行のうち、一行目と三行目、五行目では"If you have to dry the dishes"が繰り返され、二行目では「そんなめんどくさくて、飽き飽きするような雑務だ」、四行目では「あのお店に行く代わりに」と、どれほど皿を拭くのが嫌なのかが強調され、最後の四行で落ちをシルヴァスタインは作っている。

If you have to dry the dishes  
And you drop one on the floor---  
Maybe they won't let you  
Dry the dishes anymore.

拭いている皿を落として、割ってしまえば、大人たちはもうお手伝いを頼まなくなるという落ちなのだ。現実にはそのように進まず、こっぴどくその子は怒られる可能性は高い。とは言え、落として割るのは一つの可能性として考えられるわけであり、言いつけられたことを言われた通りにするのではなく、どうしたらその支配から抜け出ることができるのかを考えることに意味がありそうだ。ウーピーの動画には"Whoopi Goldberg Reads Shel Silverstein for Banned Book Week"とタイトルがついている。「禁書週間」はアメリカで1982年から行われている。学校、図書館、書店で発禁扱いになる本が増えてきたことに対し、本を読む自由を訴えるために毎年秋に行われている。2011年の「禁書週間」をアピールする動画でウーピーはこの作品を読み上げている。1980年代にアメリカのいくつかの小学校などでシルヴァ



スタインの作品が大人の価値観に即していないとか、子どもを怖がらせるなどの理由で禁書扱いになっているから、ウーピーがこのイベントで彼の作品を取り上げるのも自然に思える。

ただ紙面上に文書でその意図を表明するのではなく、実際に声に出すことで、書き言葉だけでは得られないインパクトや言葉の直接性を感じることができる。丸ブチのメガネをかけドレッドヘアをしたウーピーはこの作品を読み上げる前に動画で、次のような説明を加えている。

Hay, I love Shel Silverstein's poems for children and I'm always shocked that people wanna censor them. But they do. Let me give you an example and you can make up your own mind. This is one of my favorites.

ウーピーは子どもの頃からシルヴァスタインの作品に親しんできたのだろう。そして、彼の作品を検閲し、禁書扱いにする人たちに対してショックを受けている。そこである作品を読むから、動画を視聴している人たちにその作品が禁書に値するか考えてもらうためにそれを声に出している。同じ行が繰り返される前半部では、同じペースでリズムカルに声にし、下から三行目の "Drop one on the floor" の後でためを作って、流れを変えている。最後の二行は一気に読み上げ、"won't" が強調され、嫌なことからの解放され、晴れ晴れとした気持ちを感じられ、読み上げた直後のウーピーのニヤリとした表情はこの作品の全てを物語っている。そして読み終わった後に、"I read a lot of banned books." と語り、書籍の検閲に対する反対の意思を示している。この作品は実際子どもたちが皿を割って、お手伝いをしなくなっているという理由で禁書対象にした公共団体もあったようだが、それが事実なら子どものいる多くの家庭で頻繁にお皿が割られて、食器会社は儲かって仕方がないだろう。しかし実際はそんなことは起きていない。現実の世界と空想の世界の関係を理解できない人間がこの作品を検閲しようとしたのだろう。作品の意味は実際にお皿を割る、割らないではなく、現実にはあり得ないけれど、皿を割る可能性を考える点にある。子どもが大人の鼻をあかそうとしてイタズラを仕掛けるような気持ちを持たなければこの作品を楽しむことはできない。ただ活字を読むだけで

なく、ウーピーの気持ちのこもった朗読を聞くことで、作品が本来持っていた力がよみがえってくると言えるのではないだろうか。

ラッパーの T-Pain はウーピーと同じくアフリカ系アメリカ人であり、言葉を声にする点で表現力に優れている。元々日本語と比べ、英語は感情を直に表現しやすく、淡々と読み上げるより、読み手の気持ちが込められている方が聞き取りやすくなり、理解しやすくなる。ウーピーの朗読と同じく T-Pain も実際に楽しんで作品を読み上げている。詩を声にして身体から外に出すことで、作品が持っている力をよみがえらそうとしている。この点でも詩を声にすることと楽器の演奏を比べたくなる。意味がわかっても、演奏がうまくなければ、成功ではないのだ。さてこの動画は元々は The Boom Box という音楽系のサイトに 2014 年にアップされたようだ。『歩道の終わるところ』から "OURCHESTRA" (23), "NO DIFFERENCE", "MY RULE" と "THE LAND OF HAPPY" を読み上げている<sup>7)</sup>。

"OURCHESTRA" はお金がなくて楽器の買えない子どもたちが、太鼓の代わりにお腹を叩き、ホーンがないから鼻をならす。「鼻を鳴らす」ところで T-Pain は右の人差し指で鼻を叩きフンフンと音を出し、元の作品を自分なりにアレンジして演出している。「値段がものすごく高い立派な楽器があって、多少はいい音を出すオーケストラ」が存在することを認めつつ、それとは違う「自分たちのオーケストラ」、Our chestra に自信を持っている。

Hey, we're making music twice as good  
By playing what we've got! (WSE 23)

全体的に大きな声でメリハリをつけて T-Pain はこの作品を声に出しているのだが、最後の "what we've got!" の部分は小声に変え、変化をつけている。この作品をリーディングの最初に持ってきたのは、音楽に携わる一人として、音楽が持つ自由な雰囲気を示したかったのではないかと思われる。

二つ目の "NO DIFFERENCE" を選んだ理由は自分がアフリカ系アメリカ人であるからだろう。この作品には人種差別を乗り越えようとする気持ちが込められている。

Small as a peanut,  
Big as a giant,  
We're all the same size  
When we turn off the light. (WSE 81)

明かりを消してしまえば、小さいピーナッツも、大きな巨人も、みんな同じ大きさになる。T-Pain は前半を特に強く声にし、四行目は穏やかな調子で声にしている。明かりを消してしまえばみな同じというのはこの後に続く三つの節でも繰り返えされている。次の節では「サルタンのように金持ちでも、ノミのように貧しくても、明かりを消せば、価値は同じ」となる。三つ目の節では、「赤、黒、オレンジ色、黄色、白、明かりを消せば皆同じに見える」と、肌の色による違いも明かりがなければ消えると主張する。最後の節では、結論が語られる。

So maybe the way  
To make everything right  
Is for God to just reach out  
And turn off the light. (WSE 81)

人種差別をなくす方法として、神様が手を伸ばして明かりを消せばいいというのがこの作品の結論なのだ。この作品とお皿の詩が共通しているのは、想像する点にある。実際には子どもたちはお皿を割らず、想像の中でそれを楽しむのと同じように、日常生活で日中明かりを消すことはできないが、そんな状況を想像することは可能であり、そこに面白さを感じることができる。この節でもT-Pain は前半を強く読み、最後の一行は無声音気味にして、小声で語り、読み終わると、かなり長い間大声で笑った後で「俺たちこんな風にすればいいじゃないか」と語っている。言葉の持つ意味を噛み締めて、そこに込められた皮肉や解決方法を心から楽しみながら読み上げていることが伝わってくる。

次に彼が読み上げている "MY RULE" は男性中心主義的な男性が女性に求める行為を列挙し、最後にはその女性にふられるのだが、そこに感じられる落差のようなものがこの作品の魅力になっている。

If you want to marry me, here's what you'll have to do:  
You must learn how to make a perfect chicken-

dumpling stew.  
And you must sew my holey socks, (WSE 74)

「俺と結婚したいなら、これくらいできなきゃダメだ」という出だしからして、フェミニズムが勢いをつけていた1970年代にこの作品が発表されたことを考えると、時代錯誤的に聞こえる。料理も上手くて、裁縫も得意な良妻賢母な女性を語り手は求めている。この後の部分では、「混乱した俺の心をなだめ」、「背中をかく技術を磨け」とか、身勝手な要求が列挙されている。この時代に女性にそのような献身的な役割を求めることを「我が決まり」とするなら、どんな結末が来るのかは最後の二行で暗示される。

You must shovel the walk... and be still when I talk.  
And---hey---where are you going?

「歩道の雪かきをし、俺が話しているときは口を挟むな」と次の行の間には乖離がある。男の身勝手な要求を求められた女性は業をにやして、その場を離れたのだろう。だから男は「どこに行くんだ?」と問いかけている。結局、身勝手な男の求めるものが叶えてもらえない時代になってしまったこと、それを理解していない男の哀れさや時代とのズレを描いている作品と言えるだろう。日本とは比べ物にならないくらいに女性の人権が認められるようになったアメリカを生きる男性の意識という点で、T-Pain もこの作品に共感している。最終行が来るまでは、自信を持って、重々しく女性に命令をするのだが、最終行ではやや駆け足で、途方にくれたように読み上げている。女性が離れていくときの男の気持ち、驚きと寂しさを感じさせてくれる。

最後に T-Pain が読み上げている "THE LAND OF HAPPY" はシルヴァスタインの作品の中でも人気のある作品の一つだ。幸福に対する批判的な視点を持つ作品であり、建前ではなく、本音を大事にする点でシルヴァスタインらしい作品である。「幸せの国に行ったことはあるかい、そこではみんなが一日中幸せなんだ。冗談を言ったり、最高に幸せなことを歌ったりする。」この国に行って、住んでみたいと思う読者もいるだろうが、ひとまず作者の意図に従うことにしよう。

There's no one unhappy in Happy,  
 There's laughter and smiles galore.  
 I have been to The Land of Happy---  
 What a bore! (WSE 143)

この作品でも終結部に落ちがある。「そこでは不幸せな人はいないし、笑いがあり、笑顔が輝いている。」しかしそこに噓くさを語り手は感じるのだろう。あるいは、不幸せや災害や災難を経験し、そんな世界を生きてきた者にはここに描かれた「幸せの国」を信じることはできない。そんな国があって、行ってみたならば、物足りなさを人は感じるかもしれない。そもそもそんな国は存在できないという意味と、そんな国があったとして、そこを現代人が訪れたなら満足できない点で、苦い味わいを持つ作品だと思う。T-Pain は他の作品同様、最後の二行が来るまでは威勢良く、大声で作品を声に出している。最後から二行目でやや声の勢いを落とし、ややタメを作って、最終行はつぶやくように吐き出している。T-Pain はここまで両手で本を顔の前に持ち上げて読み上げているのだが、この作品の最終行では本を膝に置き、カメラに向かって「なんて退屈」と語り変えている。表情もおどけた感じからシリアスなそれに変わり、上で述べた複雑で、多義的な意味合いを読み込むことができる。

ネット上で発見したシルヴァスタイン作品を使った動画でもう一つ忘れられない作品がある。"ATION" (LA 59) をラップ調で声に出している動画だ。作品のタイトルは名詞を作る接尾辞を示している。

If we meet and I say, "Hi,"  
 That's a salutation.  
 If you ask me how I feel,  
 That's consideration.

二行が対になり、一行目の行動に対し、二行目でそれは「挨拶」だとか、「思いやり」だとかラテン語に由来する名詞が示されていく。わかりやすい日常的な表現で抽象的な名詞を説明している。最後の部分を引用しておく。

If we help each other home,  
 That's corporation.  
 And all these ations added up  
 Make civilization.

(And if I say this is a wonderful poem,  
 Is that exaggeration?)

「お互いの宿題を助け合えば、それは協力。/これまでのエイションが集まって/できるのが文明。/(これって素晴らしい詩だねって僕が言えば/それって誇張かな?)」となるが、最後の二行は自画自賛だろう。この作品をネットで動画にしているのは Fluency MC (以下 Fluency とする) という名前で、フランスで英語の教師をしているようだ。ラップのリズムを使って英語を教え、その様子を動画にし、"ATION" もそこで使われている<sup>8)</sup>。動画が始まるとトントンタン、タンタンタンというドラムのリズムが聞こえ、それに合わせてラップが始まる。この作品の二行を単位としてこのリズムに合わせて Fluency が全体を声にし、二回目は画面に "now repeat after me" と表示され、Fluency が語った後に英文のキャプションが画面に出てきて、視聴者がそれに合わせて英語を発声できるように構成されている。英文を声にする上で強く読む部分と弱く読む部分、リエゾン(音の連結)や音が弱化している箇所を正しく発声できれば、彼のラップの発音を習得することは可能だ。Fluency が英語の教育でラップを使った理由の一つはこうした英語の音の特性を無意識的に習得させることにあると思う。

一つの作品に対し演奏の仕方はたくさんある。どのように演奏するのか、言葉を音にする重要性をここまでで示すことができたと思う。英語で書かれた詩を朗読すること、あるいは声にすることでどんな英語力がつくのかというと、英語で書かれた言葉の意味を確認しつつ、言葉を声にすることでそこに込められた感情を再現することだと思う。日本の英語教育の中でこのような声を作することは容易ではない。英語を声にして読む訓練を受けていなければ、たどたどしく読んで英語を声にするのがせいぜいであり、正しく声にできていたとしても、内容が理解できているかどうかは疑わしい場合もある。周りから評価するのは難しいとしても、英語を発声している本人には英文の内容が理解できているかいないかは当然分かるだろう。散文よりも詩の方が英文を声にする点では取り組みやすいと思う。詩の言葉は感情に働きかけるものが多いし、リズムや脚韻などが使われているからだ。シルヴァスタインの作品のように、作家本人やウーピーや T-Pain などのアーティストが声に出しているお手本があれば、それを真似て、コピーを試みるのが手っ取り

早いだろう。

### ミュージカルになった『歩道の終わるところ』

朗読にとどまらず、シルヴァスタインの『歩道の終わるところ』を元にミュージカルも作られている。ニューヨーク大学のティッシュ・スクール・オブ・アーツの学生たちが2014年の3月にブロードウェイにある大学の劇場で行なった公演の様子をネット上で見るができる。動画の説明には"unofficially"と書かれているので、不特定多数の観客に公開されたものではないようだ。シルヴァスタインの作品が彼の死後もどのように受容されているのかを知る上で、興味深い公演だと思われる。出演しているのは男子学生四名、女子学生五名、会場は特に舞台があるわけではなく、黒い床の会場に椅子や腰掛け用のブロックが適宜配置され、観客はその周囲から公演を見ている。ネット上には一つの動画に作品が二本ずつ、全部で六つの動画がアップされている。その内の一つは"Opening/Smart"と題されているので、おそらくこれが冒頭の作品だと予測できる<sup>9)</sup>。但し、それ以降の順番については知るすべがない。一つ目の"Opening"はミュージカルの構成上用いられた名前であり、実際には『歩道の終わるところ』の最後の作品"THE SEARCH" (WSE 166) を最初に持ってきている。他の作品では、一人で歌ったり、二、三人で歌っているものが多いが、一曲目は全員でコーラスをしている。この作品は虹の足、つまり大地から虹が立ち上がっている場所には黄金の入った壺が置いてあるという伝承に基づき、それを探し出すという設定になっている。作家として独り立ちし、一作目の詩集『歩道の終わるところ』を発表することができたシルヴァスタインの気持ちを正に表していると思える。

And searched and searched, and then---  
There it was, deep in the grass,  
Under an old and twisty bough.  
It's mine, it's mine, it's mine at last....  
What do I search for now?

探したあげく黄金を見つけ、大金を手にしたところで終わりにするのではなく、今度は何を探せばいいのか悩みつ、次の目標を探しに行こうとするのはシルヴァスタインらしいプロットと言えるだろう。学生たちのミュー

ジカルでは、舞台は暗いままで車の警笛の音や子どもたちが笑う声などが聞こえ、少しずつ照明が灯されると舞台の上を動き回り「黄金の壺」を探す九人が声を合わせてこの作品を歌い始める。「草むらの中にそれはあった」というところで歩くのをやめ、照明を全員が浴び、観客の方に向かって、「これは私のだ」の部分では、三人ずつ組みになって、「私の」に強勢をつけて歌いながら前に踏み出してくる。ここで場面は最高潮に達している。最後の行の「今度は何を探せばいいのか」では、一転途方にくれたような表情と歌声になり、目標を手にした時の虚しさを表現している。ミュージカル版では、そこからシルヴァスタインの作品を手掛かりとした自己表現の旅が始まると言えるだろう。

"SEARCH" に続いて演じられている "SMART" (WSE 35) ではマザーグースに登場するおばかなサイモン的な主人公が描かれている。本人は自分がお利口だと思っているが、周りから見ればその愚かさは証明するまでもない。作品は次のように始まる。

My dad gave me one dollar bill  
'Cause I'm his smartest son.  
And I swapped it for two shiny quarters  
'Cause two is more than one!

父からもらった1ドル札を、一つより二つの方がいいという理由でこの子はアメリカのクォーター硬貨 (25 セント硬貨) 二枚と交換する。ミュージカル版では東洋系の男性がこの詩を独唱し、他のメンバーは交換する相手役を務めている。その歌声は確信的で、自分の行っていることが間違っていないという自信にみなぎっている。さらにクォーター硬貨二枚をダイム硬貨 (10 セント硬貨) 三枚と交換し、次には目の不自由なベイツとも交換する。

Just then, along came old blind Bates  
And just 'cause he can't see  
He gave me four nickels for my three dimes,  
And four is more than three.

「目が見えないから」という部分には障害者を出し抜いてやったという気持ちも入っているだろうが、実際には30セントをニッケル硬貨四枚、つまり20セントと交換



したのだから、主人公の愚かさは拍車がかかっていく。お金の価値が理解できない幼児であれば、紙幣一枚より、たくさんある硬貨を選ぶだろう。現実にはありえない話なのだが、落語でいうボケ役の与太郎的なキャラクターを描くことで、人の中にある愚かしさを描いているとも思える。次の節では四枚のニッケル硬貨を1セント硬貨五枚と交換する。

And then I went and showed my dad,  
And he got red in the cheeks  
And closed his eyes and shook his head  
Too proud of me to speak!

主人公の勘違いには驚かされる。交換の結果を知った父親は当然顔を真っ赤にして憤り、この子は手の施しようがないと、話して諭すこともできなくなっている。それをこの子は父が自分のことを誇りに思っているからだとして誤解する。ミュージカルでは男子学生が最後まで自分は正しいことを行なっていると自信を持って歌っているの、作品がもともと持っているおかしさが拡大化されている。

ミュージカルで使われている詩の中から、パフォーマンスされてその魅力が引き出されているものをあと三編取り上げることにする。一つ目は "LAZY JANE" (WSE 87)。この作品は挿絵と言葉が融合している点で、文字の配列で面白さを引き出そうとするコンクリート・ポエム（具象詩）と呼んでもいいだろう。ページの下に口を開けて女の子が寝そべっている。その口の上に文字が一行に一個ずつ、タイトルも含めて二十九個シンメトリで書かれている。最初に "Lazy" が七個置かれた後に "Jane" が置かれ、彼女が何をしているのかの説明が始まる。

she  
wants  
a  
drink  
of  
water  
so  
she  
waits.

名前の通り「怠け者のジェイン」は水が飲みたいので、地面に横になって待っている。"lazy" が六回繰り返されたように、"and / waits" は五回繰り返され、最後に "for / it / to / rain." で雨粒がジェインの口の中に入ろうとしている。言葉を繰り返すことで、この女の子の怠惰さ、雨が降り出すのをじっと待っている時間の長さなどが強調される。最終的に雨粒がこの女の子の口の中に入ったかどうかはわからない。シルヴァスタインの作品の中では初心者にも暗記しやすく、すぐに暗唱できる作品なので、この作品をリサイトしたり、演じる動画は少なくない。しかし、詩自体の構造がシンプルなのでリサイトには向かない作品にも思える。

ミュージカル版では、女子学生一人がこれを見事に歌いこなしている<sup>10)</sup>。ページュのタンクトップとジーンズの短パン姿で、「ヒー」と奇声を発しながら、舞台の上で側転をし、箱の上に腰を下ろし、高い声で「レイジー、レイジー」と歌い始める。「彼女が欲しいのは」のところで両手を広げ、「待っている」の繰り返し部分では、徐々に声の調子を上げ、高音へとグラデーションし、待っている切迫感を高めていく。最後にはやや調子を下げて、「レイン」が長く発音されて終わるのだが、特に最後はマイナーなキーへと変わっているせいもあり、結局水を飲むことはまだできていないように思える。原作を紙面で見ても、"rain" は口に入る寸前で空間に浮いたまま。原作でも首尾よく怠け者の女子が水を飲めることになっていないので、ミュージカル版でもそう解釈した可能性はある。すると、永遠に待ち続ける切なさを感じるべきなのかもしれない。もっとも、言葉の日常的な使われ方を離れ、視覚的にも楽しめる作品となっている点を評価すべきだろう。ミュージカル版でこの作品は見事に歌いこなされていて、一度聞いたらその歌声とメロディラインは忘れられなくなる。活字になることで失われた肉声、ミュージカルで使われることで復活していると言えるだろう。

前でも引用した "NO DIFFERENCE" もミュージカル版では使われている。人種差別を無くそうという主張のある作品ではあるが、明るさと希望を抱かせるような曲になっている。最初は一人で歌うのだが、身ぶりや手拍子も加えて、途中からは全員で歌う形になっている。赤いワンピースを着た女子学生が舞台に登場すると、片足で三回トン、トン、トンと床を鳴らしてリズムを取り、その直後に "Small as a peanut" と声にした直後に今

度は両手をぼん、ぼん、ぼんと打ち鳴らしながら、"big as a giant" と語り始める。以下の部分はメロディをつけ、手拍子を打ちながら歌うのだが、ピアノの伴奏はつかない。第二節目の "Rich as a sultan" からは、彼女の左側にいた二名の男子学生も同じように語り始め、他のメンバーもつられるようにそのパフォーマンスに参加する。ここまでは一拍で一拍叩いてきた手拍子も、一回目は同じリズムだが、それに続く二回目は一拍で二回叩くように変化もつけている。第三節目の "Red, black and orange" から彼女の右側にいた男女一名ずつもそれに加わり、全員で残りの部分を一緒に語り、歌い上げている。作品のメッセージに賛同する者たちが増えていく過程を示している。この作品のパンチラインは「明かりを消せば」の部分だが、第三節最後のこのラインでは和音を使って音の深みを出し、第四節はさらに力強く、加速したリズムで歌い上げている。第四節のパンチラインは二回繰り返されて、「明かりを消せば」それが差別解消の手がかりになることを印象付けているようだ。書かれた詩や言葉は楽譜のようなものに思える。楽譜に基づき楽器をどう演奏するかは演奏する人の力量にかかっているように、詩や言葉もそれを声に出す人間の力量にかかっている。このミュージカルバージョンでは詩に曲が与えられ、そのパフォーマンスも追加されている。シルヴァスタインの元の作品が秘めていた魅力がよみがえっている。

最後に取り上げる "SARA CYNTHIA SYLVIA STOUT WOULD NOT TAKE THE GARBAGE OUT" (WSE 70-1) は前に取り上げた "BOA CONSTRICTOR" の動画、シルヴァスタインが子ども達に囲まれて歌っている動画の中で、本人が歌っている。この名前が長くなっている理由は "s" 音で頭韻を過剰に踏むためであり、"Stout" は "out" と韻を踏んでいる。料理はするようだし、鍋やフライパンを洗うことはしても、サラはゴミを捨てるのが嫌で、父親に言われてもやらないのだ。シルヴァスタインは大勢の子ども達に取り巻かれ、あぐらをかいて座り、ギターをフィンガピッキングでぼそぼそとつまびきながら歌い始める。"would not take the garbage out" の部分をアクセントをつけて歌いきたところで、子どもたちに向かって "Do you like garbage?" とアドリブで話しかけ、子供達は "No!" と答えている。それに対して、"OK! I don't love it." と語りかけた後で、また歌に戻っている。場の雰囲気に応

じてその場にいる子どもたちとコミュニケーションを取り、書かれた詩を歌にすることで歌っている作者と聞いている子どもたちが作品の持つ世界全体を分かち合っている。一方色々なゴミが部屋いっぱいに溜まっていく。

And so it piled up to the ceiling:  
Coffee grounds, potato peelings,  
Brown bananas, rotten peas,  
Chunks of sour cottage cheese.

当然調理で出てくるいろんなゴミはどんどんたまり、屋根にまで達してしまう。シルヴァスタインは大抵歌詞を見ずに歌うことが多いのだが、この詩の場合歌いながら歌詞カードを見ていることが視線からわかる。本人もどんなゴミを書いたのか覚えきれず、メロディーも単調になり、ゴミの名前をカタログ的に読み上げる感じに変わっていく。子どもたちは所々でクスクス笑っている。

Drippy ends of ice cream cones  
Prune pits, peach pits, orange peel,

「プラムの種」まで歌ったところで、"Wait a minute. I can't read it." と言うと、歌詞カードを見直して、「桃の種、オレンジの皮」とラップ調でサラのゴミを並立てる。ゴミの名前だけでは覚えるのも難しく、メロディーに乗せるのは難しそうだ。適切なリズムに合わせることで、シルヴァスタインは軽快に読み上げ始めている。

The garbage rolled on down the hall  
It raised the roof, it broke the wall...

名詞の羅列ではなく、文章の部分はメロディーをつけて歌えるのだが、その直後からまたゴミの羅列になると、ついにギターを弾くのをやめてしまう。その代わりに膝を片手で叩いて音を出し、そのリズムに乗せてリサイトをしている。

At last the garbage reached so high  
That finally it touched the sky.  
And all the neighbors moved away,  
And none of her friends would come to play.  
And finally Sarah Cynthia Stout said,

"OK, I'll take the garbage out!"

文章にすると強勢が置かれる部分とそうではない部分のはっきりするので、歌にしやすいのだろう。上の引用部分も歌に戻っている。溜まったゴミが空にまで達するというのはアメリカの民話の "tall tale" (ホラ話) の伝統に見られるのと同じだろう。そこまでゴミが溜まったところで、サラはゴミを捨てる気になる。何回も繰り返される "take the garbage out" の同じメロディーで歌われているが、ここでは「捨てる」方に意味は変わっている。また、「捨てない」から「捨てる」に変わることで、ひとまずこの話の結論は出たかに見える。

しかし、そこで終わらないのがシルヴァスタインの面目躍如たるところだろう。上の結論をはぐらかす形でもう一捻りが付け加えられている。

The garbage reached across the state,  
From New York to the Golden Gate.  
And there, in the garbage she did hate  
Poor Sarah met an awful fate,  
That I cannot right now relate  
Because the hour is so much too late.

空まで達したゴミはニューヨーク州からゴールデンゲートのあるカリフォルニア州までアメリカ中に溜まって、そのゴミの中でサラはひどい運命に出会うのだが、それがどんな運命だったのかわからないまま終わる。暗黙の了解のもと、はっきり言わないまま読者に予想させて終わるスタイルをシルヴァスタインは使うことがある。一般論的に言えば命を落とすか、ゴミまみれの人生を送るのだが、そこを明らかにすることに詩の目的はないのだろう。この後に最後の二行が残っている。

But children, remember Sarah Stout  
And always take the garbage out.

ここで子どもたちに直接メッセージが向けられ、サラを教訓として、ゴミを捨てなさいで終わるのだ。ゴミ屋敷のサラの様子を想像するのも、数々のゴミが存在することを考えるのも子どもたちなら楽しめるだろう。最後の "the garbage out." のところでは、何人かの子どもたちは一緒に声を出している。"take" の主語がサラから、

子どもたちになることで、この作品で数回繰り返されてきた "take the garbage out" は直接子どもたちの問題へと変化している。シルヴァスタインの歌い方が印象に残り、子どもたちが楽しそうに聞いたり、部分的に歌っている姿を見ても、言葉がそこで共有されていることを感じるのがわかる。

さて、ミュージカル版では白いティーシャツにジーンズのジャケットを着た女子学生が一人でこの詩を歌っている<sup>11)</sup>。メロディーはシルヴァスタインが歌っていたのとは全く違い、勢いがあってミュージカルに適したメロディーと言える。ピアノの伴奏から始まり、女の子の後ろには背の高い男性が立って、彼女に何か文句をつけているようだが、声を出すことはない。男性は「ゴミを捨てなさい」と彼女に言っていた父親役なのだろう。駆け足のようなスピードで彼女は歌い始め、舞台の上を移動し、父親もそのあとをつけていく。"would not take the garbage out" の箇所では振り返って父親に向き合い、両手を振り下ろして、「ゴミは捨てない」と力を込めて告げている。ここで父親は娘を諭すのを諦め、ボックスに腰をかける。ゴミの名前の羅列の部分を彼女が歌い出すと、寿限無寿限無のように脈絡もなくゴミの名前が出てくるのだが、それに引き寄せられるかのように他のメンバーがその周りに集まってくる。その姿は野良猫達が餌を待っているかのようであり、餌を待って明るい表情をしている。そんなみんなを操るかのようにサラは声の調子を上げてゴミの名前を叫び、周りに集まった他のメンバーたちも軽快なリズムを合わせ、取り巻きながら立ち上がり、軽くジャンプをしてリズムをとっている。「ゴミが空まで届いて、ご近所さんも引っ越した」あたりで曲調は変わり、集まっていたメンバーもサラの周りを離れて、背を向ける。するとサラの声はゆっくり、ご近所が引っ越したことへの戸惑いを示すものになり、「ゴミを捨てるね」のところで、他のメンバーは振り返って彼女に顔を向け、二列になってサラの前に立ち、向かい合う二人が両手を前で組みあい、ネットのようになると、そこにサラがダイブする。地面に降りると、最後の「子どもたちよ」の部分ゆっくりとしたテンポで、優しいメロディーで歌うのだが、その後はこれまでと同じ早いテンポで歌い、最後は両手を広げて歌い上げている。シルヴァスタインが歌っていたメロディーとは異なるが、作品が持つ意味はミュージカル版でも適切に引き出されている。さらに彼の作品をこのように演出し、その魅力

を引き出しているのだ。シルヴァスタインは短い戯曲も残っていて、それらを集めた *Shel's Shorts* (2003) にはこの作品が "GARBAGE BAGS" と題されて収蔵されている<sup>12)</sup>。彼の作品の多くはパフォーマンスされることを前提に書かれているので、本人もこのミュージカルを見ることができたなら、満足したのではないだろうか。死後も彼の詩のファンが増殖し、作品を表現する可能性も増えてきている。

## まとめ

この論文の前半ではシルヴァスタインの作品が持つ多様な力、特に音の持つ魅力を解き明かした。次にそうした作品をリサイトして、作品に込められた力をよみがえらせようとするウーピーなどの動画を紹介し、なぜそうするのかを考えようとしてきた。結論として言うなら、シルヴァスタインの作品には音の魅力が溢れている。そんな魅力にとりつかれた者達は、作品を読み上げ、声にすることでその魅力を自身で感じようとしているのではないだろうか。身体を通して言葉を音声化することで感じられる喜び、快感があるから、声にするのだ。シルヴァスタインのように言葉に皮肉を込めたり、言外の意味をほのめかしたり、微妙に話の流れを逆転させるような作品、ニュアンスの陰影が強い作品の場合、意味の展開や逆転を確認するには、ウーピーのように読み上げることが必要なのではないか。英語を理解する方法として、日本語に訳して理解する訳読、英語での質問に対して英語で答えるなどの問答、文法の学習に加えて、英語を声に出して読み上げ、英語の語順を通し意味が形成される過程を体験すること、英語という言葉が持つ力を味わえる力を育てることも忘れるべきではない。そのためには、前の話の語尾の子音と後ろの語の最初の母音が連結するリエゾンのような音の変化を学び、英語のリズムや強勢を再現し、正しく発音できるよう自分なりの英語の声を作ることが必要になる。散文と比べて分量が短く、感情が込められた詩を声にする方が、そんな英語の力を感じ取ることは容易だろう。だから、アメリカの学生は子どもの頃からクラスで詩の暗誦を行うよう指導され、その結果言葉の持つ音の豊かさに自然に親しむことができる。英語で歌うのも一つの方法だが、会話するときの英語の声を作る点では、シルヴァスタインの詩を暗誦することは日本人が英語を学ぶ上で大きなメリットを持っている。

注

- 1) e.e. cumming, paintings by Marc Chagall, *may I feel said he*, Welcome Enterprise, 1995. Naomi Shihab Nye, *Famous*, Wings Pr, 2015.
- 2) <https://www.youtube.com/watch?v=6ezxZvOmPMg>
- 3) <https://www.youtube.com/watch?v=Bv2LUva-fo0>
- 4) 細かい点を入れると数十か所の違いがある。(小泉 10-11)
- 5) CDの音源を使ったネット上の動画でも確認することができる。Cf. <https://www.youtube.com/watch?v=eOI5Mr7GQQM>
- 6) <https://www.youtube.com/watch?v=YCfTeat4eEs>
- 7) <https://theboombox.com/t-pain-reads-shel-silversteins-where-the-sidewalk-ends/>
- 8) <https://www.facebook.com/watch/?v=1299853526721195>
- 9) <https://www.youtube.com/watch?v=IjlOYzEy6FM>
- 10) <https://www.youtube.com/watch?v=7kRTXldi4o0>
- 11) [https://www.youtube.com/watch?v=4zQP\\_RM9SL0](https://www.youtube.com/watch?v=4zQP_RM9SL0)
- 12) Shel Silverstein, *SHEL'S SHORTS*, Dramatists Play Service INC., 2003, pp. 77-8.

## 引用文献

- 1 cumming, e.e., paintings by Marc Chagall, *may I feel said he*, Welcome Enterprise, 1995.
- 2 小泉純一, 「シェル・シルバスタインの The Giving Tree 五十年と他者依存: やり切れなさど割り切れなさ」『日本福祉大学全学教育センター紀要 7』, 日本福祉大学全学教育センター, 2019.
- 3 Moss, Jeff, *The Other Side of the Door*, Bantam, 1991.
- 4 Shihab Nye, Naomi, *Famous*, Wings Pr, 2015.
- 5 Silverstein, Shel, *A Light in the Attic*, Harper Collins, 1981. (LA)
- 6 ----, *Everything On It*, Harper Collins, 2011. (EOI)
- 7 ----, *Falling Up*, Harper Collins, 1996. (FU)
- 8 ----, *Giving Tree*, Harper Collins, 1964. 『おおきな木』, 翻訳 村上春樹, あすなろ書房, 2010.
- 9 ----, *Shel's Shorts*, Dramatic Play Service INC., 2003.
- 10 ----, *Where the Sidewalk Ends*, HarperCollins, 1974. (WSE)